



しゅう しょう ろん
修証論 (下)

延寿にいたる思想の流れ

柳 幹 康

前回みた延寿えんじゆの修証論しゅうじゆろん（修行と証の理論）は、それまでの仏教思想の流れを承けて構築されたものでした。今回はインドから中国、そして禅宗の馬祖ばそと宗密しゆみつを経て延寿にいたる思想の展開を見てまいります。

もともとインドの仏教では、人が今生で仏になれるとは考えられていませんでした。古い時代の出家者は瞑想修行により煩惱ぼんのう（心の汚れ）を除いて羅漢らかん（煩惱を滅した聖者）になることを目指しましたが、羅漢は仏よりも劣る存在です。また後には従来の仏教を「小乗」しょうじやう（自分の救いだけを求める小さな乗り物）と批判し、自ら誓願せいがん（誓い）を立てて菩薩ぼさつとなる人々が現れ、自身の立場を「大乘」だいじやう（一切衆生を遍く救う大きな乗り物）と称しました。彼らが言う菩薩もまた「仏と同じ悟りを目指す心ある者」の意で、いまだ仏ならざる存在です。そもそも古いお経に記されるお釈

迦様の予言によれば、この世界で次に仏になるのは弥勒みくという名の菩薩で、彼が仏になるのは一般に五六億七千万年後のことだとい

います。お釈迦様が法を説かれてからまだ二千五百年しか経っておりませんから、この教えを信じる限り、これまでも、そしてこれからも五六億年以上、この世界に生まれた人々が今生で仏に成ることはありえないということになります。

このような理解は仏教が伝わった中国においても長らく共有されてきましたが、八世紀になると禪宗の人々によって、根底から覆されることになります。彼ら禪僧たちによれば、人はありのままにあり、禪宗歴代の祖師は皆この事実を教外別伝きょうげくべつでん——教え（お経）の外で別に伝えて来たのだ——といっています。この点について中国禪の実質的開祖とされる馬祖道一（七〇九—七八八）は次のように

述べています。

汝ら諸君、いまこの場において、自分の心が仏であり、この心がまさに仏の心なのだと言いなさい。だからこそ（禪宗初祖の）達磨大師は南インドから（この中国に）やってきて一心という最高の真理を伝え、諸君を悟らせようとしたのだ。

（『祖堂集』巻一四）

馬祖はこの「自心が仏だ」という真理を周囲の人々に悟らせ、それを体得した後はただ衣きを着て飯を喫くい「ありのまま」に時を過ごせばよいと説きました。いわば馬祖は、それまで遙か彼方に設定されていた「仏」という仏教の理想像を、私たちの日常へと引きおろしたのです。

これに対し、従来の仏教の立場から批判を

加えたのが宗密（七八〇—八四二）です。宗密は禅と華嚴の流れを汲む博識の僧侶で、馬祖の言う悟りは単なる知的理解に過ぎず、馬祖が説く「ありのまま」は任病（悪しき任運ありのままの病）に他ならないと批判しました。宗密によれば、「自心が仏だ」と頭で理解しても身体に染みついた煩惱は残るため、引き続き修行に励み、長い時間をかけて煩惱を除去していかなければなりません。いわば宗密は馬祖が日常に引き下げた「仏」を、あらためて遠い彼方の理想へと引き上げたわけです。

宗密が没して約百年の後、延寿は馬祖と宗密の説を統合する形で独自の修証論を構築しました。延寿の考えはこうです——たしかに宗密の言う通り、煩惱が残っているなら、「ありのまま」に安住することなく煩惱を除く必要がある。ただしこれは上根じょうこんの境界に過ぎない。それに対し馬祖の「ありのまま」は

上上根じょうじょうこん、すなわち煩惱を瞬時に断ち切り、宗鏡（＝仏たる己の心）に回帰する最も優れた者たちの境界である。馬祖をはじめ仏心を伝える禅宗の歴代祖師は、衣きを著たり飯くちを喫う日常の営為と同じレベルで、ただ「ありのまま」に円修えんしゅう（本来仏である慈悲の心に基つき、戒律から外れることなく、衆生を救済）してきたのだ——。

つまり延寿は、宗密と馬祖の説をそれぞれ上根と上上根の境界に配することで、人々を円修へと導く自身の修証論を構築したのでした。

柳幹康（やなぎ みきやす）

一九八一年栃木県生まれ。二〇一三年東京大学大学院博士課程修了、博士（文学）。現在花園大学国際禅学研究所専任研究員・専任講師。著書に『永明延寿と「宗鏡録」の研究——一心による中国仏教の再編』（法藏館）。

お願い

花園俳壇・花園歌壇

俳壇・歌壇への投稿は、それぞれ別の官製はがきを使用し、各三句(首)までを読みやすく書いてお送りください。

*※切りは毎月1日です。

花園へのご意見・感想など

本誌へのご意見・感想など、「編集室花園係」までお送りください。お待ちしております。

送り先

〒616-8035 京都市右京区花園妙心寺町64
妙心寺派宗務本所内編集室
俳壇／歌壇／花園 係

*住所、氏名を必ずお書きください。

*俳壇・歌壇ともに作品は未発表のものに限ります。(他誌投稿作品、転載は不可)

*なお投稿はお返しいたしません。

花園
hanazono

「いつもココロに花園を」
あなたとわたしのポケットエッセイ集

【花園】第67巻 第10号(通巻第794号)
平成29年10月1日発行(毎月1日発行)
定価55円

【発行人】栗原正雄

【編集人】畠中寿浩

【印刷人】喜田真司

【発行所】〒616-8035 京都市右京区花園
妙心寺派宗務本所 教化センター
振替／01060-9-1400番
電話／075-463-3121番

表紙の絵

「秋の匂い」



キンモクセイの花を集めておままごと。
秋の匂いいっぱいのお膳ができました。

絵・SAYOKO

妙心寺派ホームページ…………… <http://www.myoshinji.or.jp>

臨黄ネットワーク(臨済宗・黄檗宗全般)…………… <http://rinnou.net>

『花園』誌一冊送りの年間購読料は、1,560円(送料込)です。
お申し込み・お問い合わせは頒布課まで。

*乱丁、落丁本はおとりかえいたします。